

# 茂原市史編さん事業の活動

(近世史調査その二)

No.8

茂原市史編さん事業では、これまでさまざまな形でその成果を市民の皆様公表してきています。近世史部門では、令和4年度の第2回歴史セミナー(郷土資料館のテーマ展「近世の名主 高師村宇佐美家と立木村高橋家」に際して開催されました)にて、調査・研究の成果を盛り込んだ講演を行いました。

講演のテーマは「近世の村と名主―高師村宇佐美家・立木村高橋家を一例に―」(講師・小関悠一郎)です。江戸時代の郷土の村々とその運営を支えた名主たちの姿を史料に基づいて明らかにし、郷土の先人たちの軌跡を振り返ろうという意図です。

私たちのくらしからは縁遠いテーマのようにも思えますが、近世の村と名主について知り考えることは、私たちにとって様々な意義を持ちうるはずで、例えば、名主などをつとめた旧家の人々は、明治以降(近代)の郷土に何を

もたらしたのか。これを理解することは、私たちの生活の基盤である現在の交通・産業・教育などの原点を見つめることにつながるでしょう。

そこで、このことに関する資料館所蔵塚田家(宇佐美家)文書中の史料(原漢文)を紹介してみましよう。

【現代語訳】宇佐美氏は高師村の旧家で、代々俊才を輩出しています。先代の四方吉翁は、亀田篤谷に学んで才名ともに高く、いとこの故板倉桑軒とともに郷土の人々に双壁と呼ばれました。決して過大評価などではありません。私は公私にわたって十数年にわたって交流してきました。その子息である平吉郎は茂原町長となつてすこぶる人望を得ています。：高橋鶴洲種健稿

この文章を書いた「高橋鶴洲種健」とは、県下6番目の大地主で、自由民権運動の一翼を担い、県会議員から衆議院



▲塚田家文書4-1-21-1

議員、のちに貴族院議員となつて国政にも関わった立木の高橋喜惣治(1847-1918)です。こうした輝かしい経歴を持つ高橋喜惣治が、俊才で声望を集め郷土の人々に双壁と称されたと高く評価したのが、宇佐美四方吉(久左衛門)(高師)と「板倉桑軒(胤臣)(茂原)でした。

これらの人々に関しては、平成30年の明治150年記念テーマ展「明治の茂原に会いに行く」及び市史編さん事業講演会にて、高橋喜惣治・板倉胤臣(桑軒)が鶴枝村上永吉の千葉天夢らとともに、交通・産業・教育などの各方面で、郷土の近代化に大きな役割を果たしたことが示されました。宇佐美四方吉も板倉胤臣とともに幕末にいち早く維新政府に呼応したことが知られています(『茂原の古文書

史料集第3集』一九九頁)。先に引用した漢文史料は、彼らが互いに敬意を抱きつつ交流し、郷土の近代を支えていったことを示しているのです。

彼らが明治期に見せた相互のつながりと大きな力量は、村や地域の運営に関する彼らの父祖以来の取り組みと経験がその基盤となつたはずで、彼らのうち、高師村に居を構えた宇佐美氏は、戦国期の土気城主酒井氏に仕えた「仲宇佐勘解由」を祖とするとい

います(「高師村古来覚」塚田家文書)。主君(酒井氏)の没落に伴い、帰農した宇佐美氏は、江戸時代、高師村の有力百姓・名主として、地域の様々な問題に取り組みました。宇佐美氏は、耕地・屋敷地の造成や植林、開墾地の権利や運営をめぐる争いの調停などを通して、村・地域の



▲高師村絵図(資料館収蔵)

リーダーとしての地位を築いていくのです。高師村は二人の殿様―旗本の安藤氏と笈氏―によって支配されましたが、次第に彼らも宇佐美氏の力を頼りにするようになりま

す。近世後期に笈氏は、「その方(仲宇佐久作)へ：勝手向き(領主財政)申し付け：両知行所の儀(知行所支配)はその方へ一円相任せ置き候」と申し渡します。旗本

笈氏は、知行所の支配全般、さらに領主財政の運営までも宇佐美氏に一任しているのです。仲宇佐勘解由から約三〇〇年、宇佐美氏は再び武士的存在として地域支配の立場に立ちました。その経験は近代以降の地域運営・政治参加の基盤になつたと言えるのかもしれない。

新しい『茂原市史』では、こうした先人のあゆみをより具体的に伝えたいよう調査・編集作業を進めています。茂原市史編さん委員会編さん委員長 小関悠一郎

問合せ

美術館・郷土資料館

☎(26)2131 1 ㊟(26)2132

